

16. 舌草刈りから和牛繁殖経営へ～初めての子牛育成への挑戦～

東部振興局 生産流通部

○川ノ上実、文田登美子

1 背景・目的

東部振興局では、地域の景観損失及び獣害発生の原因となっている耕作放棄地を解消すべく、「おおいた型放牧」を推進しており、技術指導の他、放牧用の繁殖牛を有しない集団等に対しては、地域内レンタカウの斡旋を行うなど、誰でも放牧に取り組めるよう積極的な支援を行っている。

昨今では、レンタカウによる放牧にとどまらず、集団自らが繁殖牛を所有することで、放牧牛を常時確保するとともに、生産された子牛を育成販売して所得確保につなげたいという相談もあり、その取組実現に向けた支援を行っている。

このような中、子牛飼養経験のない放牧実践集団（中岐部和牛放牧研究会～国東市国見町～）が行った初めての子牛育成の取組みを支援したので、その事例を報告する。

2 内容及び成果

（1）中岐部和牛放牧研究会のこれまでの取組み

国東市国見町中岐部の地元有志 5 名で構成。平成 19 年にレンタカウによる耕作放棄地放牧を試みた後、繁殖牛 2 頭を所有し、出生した子牛の育成等に取り組んだ。現在、3ha の耕作放棄地等に 6 頭の繁殖牛（自己牛 4 頭、レンタル 2 頭）を放牧している。

（2）子牛飼養管指導

子牛飼養管理マニュアルに基づき、発育生理や飼養管理技術等について勉強会を実施。

また、出生した子牛の飼養管理方式は、「1 案：母牛と放牧」「2 案：放牧場内に子牛用飼育施設を設けて柵越し哺乳」「3 案：生後 3 日齢で母子分離し人工哺乳」から比較検討を行い、3 案の超早期母子分離方式での子牛育成を行うこととした。

（3）子牛発育状況

育成した雄・雌 2 頭の人工乳摂取量及び発育状況（一部抜粋）は以下のとおり。いずれも下痢等の疾病はみられず良好な発育を示した。なお、2 頭とも約 3 ヶ月間飼養し雑子牛市場へ出荷した。

雄（85 日齢時点）人工乳摂取量：2.4kg/日 体高 95cm

雌（78 日齢時点）人工乳摂取量：2.0kg/日 体高 85cm

（4）成果の波及

管内繁殖農家を対象に実施した東部地域肉用牛飼養管理研修会（H21.4）にて事例紹介。

人工乳摂取の重要性など哺乳期の飼養管理徹底を改めて周知した。